

風の末裔シリーズ・5th シーズンの8

～蜃気楼～



黄色い地平が揺らめいて、灰色の空にとろけるような影が立ち上がった。

「シドさあん！ あれ、何ですか?!」

砂に裸足の足跡を付けて、長いおさげの娘は振り向いた。

「蜃気楼だ。砂漠の精霊が見せる幻」

シドは二頭の馬を曳きながら、後ろをゆっくり歩いている。

「どっ？ 気が済んだ?」

「ええ!」

エノシラは両手に靴を持ったまま、足を爪先立ててクルリと回った。砂と負けず劣らずの真っ白い素足。

「砂漠の第一歩は裸足で…って決めていたんです。ルウに砂漠の物語を一杯聞いていたわ。今、実際に踏んでいるなんて夢みたい」

「んじ…」

「ホント、気持ちいい。天花粉みたい！ これがずーっと続いているんですよ。素敵！ 凄いいー」

エノシラは長いおさげを波打たせて、砂を蹴って砂丘の上まで駆けて行った。

シドは相変わらずゆっくり馬を曳いて着いて行く。自分には生まれた時から見慣れた退屈でうつろひする砂の原。この娘が

いるだけで、ちょっと新鮮に見える。

「ああ」

悲鳴で我に返った。エノシラの目の前の砂が盛り上がっている。

「エノシラ、下がれ!!」

シドは剣に手を掛けて駆け出した。しかし次の瞬間、盛り上がった砂が彼女の目の高さではあんと弾けた。

「ひゃっ!」

おさげ娘は砂を被って尻餅を着いた。

「大丈夫か!」

シドが慌ててエノシラの前に立ち塞がった。

砂の煙幕がおさまる。その向こうに人影がある。

「砂が素敵って言うから、プレゼントして差し上げたのさ、お嬢ちゃん」

腕組みして斜(はず)に構えているのは、黒い髪に濃い鉛色の肌の、漆黒のハトゥンだ。砂の民は砂を自在に操る。

「はあ、けほほ…」

エノシラは髪の中や背中に入った砂を一生懸命落としながら、シドの後ろからそのヒトを見た。真っ黒い瞳が一点の濁りもなく、どんな光も吸い込んでしまっ…。

「ハトウン様！」

「この砂漠にフワカした幻想を抱いているお嬢ちゃんに、砂の恐さもちゃんと教えておかないと、痛い目を見せちまうぞ」「ここで暮らせば、そういうのはこれから幾らでも知る事になります。今はせっかくなさく砂漠を好きになろうとしてくれてるんだから、水を差す事しないでしょっ」

「ふふん、言うようになったじゃん、ちびっこナイトが！」

ハトウンという名は聞き覚えがある…。エノシラが思い出すとして、上空から懐かしい声がした。

「エノシラ!!」

粕鹿毛が風と共に降って来て、オレンジの瞳の娘が飛び付いて来た。

「ナーガが手紙で知らせて来た！びっくりした！ホントにエノシラだ！わあお!!」

ひとしぎりの再会を喜んだルウシエルが、次に瞳をキラキラさせてシドを見た。

「へえ、へえ、へええ〜ん」

「冷やかさないで下さいよ」

「冷やかすもんか。尊敬してるんだ。最高に素敵だ！シド!!」ルウは二人の肘を掴んでビヨンと跳び跳ねてから、ハトウン



を見た。

「父者(ててじま)、いつも話してただろ?。私が蒼の里でいっちゃん世話になったエノシラ!」

「ああ、ようこそ、お嬢ちゃん」

ハトウンはニコリともしないで人差し指で鼻の下を擦った。

そうだわ、ルウシエルのお父さんだ。挨拶しなきゃ。

エノシラが口を開きかけた時、ハトウンが先に喋り出した。

「しかし、略奪愛だって? そんな情熱家だったか? ちびっこナイト」

「そんな事…」

「彼女の前で言わないで下さい! あと、ちびっこナイトっていうのも」

二人が喧嘩(けんけん)けんけん言い合いを始めたので、エノシラは初対面の挨拶をし損ねてしまった。

「結局お前ら、おんなじような事やってんのな。どこまで仲良しなんだ? 前世で夫婦(めおと)だったんじゃないか?」

葡萄酒を駆け付け一杯、一息に飲み干して、ハトウンは久し振りに揃ったシドとソラを交互に眺めて愉しそつに笑った。

西風の里の中心のモエギ宅。

昔の宿屋を改装した居間で、ルウシエルの母親のモエギが出迎えてくれた。夏に身体を壊してまだ本調子でないというモエ

ギは、顔色がすくねず長椅子にもたれていたが、ウェーブのたつぷりした髪もオレンジの瞳も、ルウシエルに生き写しだ。

杯を机に置いて、ハトウンは懐から大量の手紙を出してソラに押し付けた。

「な、何ですか?」

「うちの若い衆からお前に、果たし合いの申し込み状。モエモテだな」

「は…はあ?」

「我が娘は人気者だからな」

「冗談じゃありません!!」

「まあ、全員、得物なしの素手って事で話は付けといてやった。有り難く思え」

「身が持ちません!!」

「ルウは要らないのか?」

「~~~~~!!!!」

「父者、いい加減にしてくれ。ソラは頭脳派なんだ」

「頭脳派でもナーガは頑張ったろうが。見習え」

モエギも目を三日月にして愉しそつに混ぜ返した。

「まあ人数分殴られとけ」

賑やかに会話するルウシエル達を横目に、エノシラは借りて

来た猫みたいにかしこまっていた。

「なあ、父者も母者も酷いんだ。エノシラ、何か言ってるやってくれ」

「はあ…」

ルウにいきなり話を振られて、エノシラは咄嗟に思ったままの事を口にした。

「ここでは、女性は、決闘で得る物…なんですか？」

「……………」

「……………」

ルウもシドもソラも目を丸くした。そういう言い方もあるけれど……。

「そうですね、何か？ お嬢ちゃん！」

ハトウンがわざと蛇みたいな目をして、蒼の里の上品そうな娘をねめ付けた。

「どちらが勝とうが、最終的に選ぶのは女性だ」

モエギが助け船を出した。

「あくまで女性を主体にした習慣だ。強く逞しい子種を選択したいのは、子を生む者の権利だからな」

「えと…」

子種とかサラツと言われておさげ娘は反応に困り、ハトウンは額に手を当ててクククツと笑った。

「おや」

ハトウンがやにわに真顔になり、野性動物のように瞳を光らせた。

「面倒な来客だ。俺は退散するよ。モエギ、ちゃんと食ってもうちよつと太れ。このお嬢ちゃんみたいに」

「ハトウン！」

ハトウンは玄関と反対の窓に足を掛けて、ヒラリと屋根に上がった。

「父者、気を付けてな。来週には爺様じさまん所に顔を出すから」

「ああ、じゃあな」

窓の上方から手だけ出して振って、屋根から向こうの木へ跳び気配がした。夫君が妻の家を暇いとまするに於ては珍しい去り方だ…。エノシラが呆然としていると、玄関で仰々しい声がした。

「ごめん、長殿！ お寛くつろぎの所、お邪魔でしたかな？」

\*\*\*

「例え厭番の個人的な客としても、我が西風の里にとっては重要な眷族のお立場。まっ先に長老様の所へ挨拶に伺われると思っておりますがの」

ドカドカと入って来た元老院の老人三人は、髭を撫で付けながらねちねちと喋った。やれやれと困り顔のモエギやシドの後ろをすうつと離れて、エノシラは出口へ向かった。

「じ、くら、娘御！」

「はい。」

「何故、逃げる？」

「ああ、はあ、込み入った話みたいなので外そつかと…」

「そなたの事じゃ！ そなたの！」

「は？ あたしの？」

執務室で常に縁の下の力持ちだったエノシラは、自分が重要なお立場とか呼ばれるなんて夢にも思っていなかった。

「あたしに？ どのような用でしょう？」

「どのようなとな？ 惚けておられるのか、馬鹿にしておられるのか？」

いきなり絡まれて、エノシラは困って黙った。

「元老院に挨拶に来いとや」

ルウが通訳した。

「はあ、ああ、はい。それはとんだ失礼を。直ぐに伺います」

エノシラは慌てて上着を羽織った。

「遅しじゃ！ もう長老様は休んでしまわれた！」

老人は鬼の首でも取ったように高揚して唾を飛ばした。他人

が何かをしようとすれば、それを否定する事で優位に立った気分になれる。

しかしエノシラは疑問100%顔で途方に暮れた。挨拶に来いと言いに来たのに、今来られても困るといふ。どうしろっていうんだろ？ 蒼の里には、こんな持って回った物言いをする者はいない。

「客人は長旅で砂と垢にまみれておられる」

モエギがヒシリと言った。

「挨拶に行く前に、手足の湯あみと着替えをお勧めしていた所だ。女性なのにこの惨状。あんまりだとは思わぬか？ 長老殿が、この臭いとホコリで具合を悪くされても困る。私が恥をか。長の『家族』の客人であるのだぞ」

慣れた感じで理屈を並べ、老人達は苦虫を噛み潰した顔で引き下がるを得なかった。

老人達が去ってから、エノシラは眉間に縦線を入れて、自分の肘の内側をクンクン嗅いだ。

「臭いますか？ あたし……」

堅い表情をしていた一回は大笑いして、ルウシエルがエノシラの懐に抱き付いた。

「要するに、元老院に、蒼の里の客が一番に挨拶に行かないの

が不満だったの。拗ねて見せて困らせる事で、自分達の存在の確認をしているんだ」

ルウが実に分かりやすく解説した。

「あら、まあ、あたし……」

エノシラは恐縮してモエギやシドの顔を窺った。里の一番工ついでには長で、そのモエギに挨拶すればそれでいいと思っていた。まあ、実際そうなんだが……。

「すまなかったな。私も明日でいいと思っていたのだが。しかし、まあ、やり過ぎすのに慣れてくれ。何か困ったらすぐ私に言うんだぞ、な……」

モエギが優しく言った。

元老院と長が仲違いすると、里の民を不安に陥れる。付かず離れずで上手くやっていくのが一番いいんだと、ルウがかいつまんで教えてくれた。

しかし、長が絶対の平穏な蒼の里で育ったエノシラには、派閥なんて未知の世界だ。よく分からなくて酷く緊張した。習慣の違う西風の里……。色々、気を付けなくっちゃ……。

翌日、エノシラはいつもよりおさげをキチキチに編んで、ルウに付き添われて長老宅へ出掛けて行った。西風の長老は数年前、突然倒れて床に伏したきりだ。モエギに弱味を見せたくな

いので、元老院の老人達は長老の病状を喋りたがらない。

長老のベッドの横へ通されて、エノシラは教えられた挨拶の口上を述べ、余計な事は一言も喋らなかつた。帰り道もずっとカチンコチンで、初めての西風の風景を楽しむ余裕もなかつた。

帰宅して居間に二人が入ると、蒼の里から鷹が来て、モエギが手紙を広げている所だった。

「ほい、シド、ソラ……ナーガから。こっちはルウ……ユウジーンから、……これはエノシラ宛だな」

「えっ、あたしにも?」

エノシラは驚いて手紙を受け取った。

小さく折り畳まれた紙を開くと、それはノスリからで、彼女が突然いなくなった穴を埋めた段取りが事務的に箇条書きにしてあった。そして最後に、まあ、こっちはお前の替わりなんて幾らでもいるんだから、何も心配せんと幸せになれよ……って、少し大きめの字で無骨に書かれていた。

『幸せ』って字が何か変だ。よく見ると、点々が繋がって字にしてある。

「……………」

何となく分かった。ノスリ家の女性達が、皆で一点つつつだったんだ。

早くに両親を亡くした器量がいいとは言えない娘を、皆、ずっと気に掛けてくれていた。そしてその幸福を祈ってくれているのだ。鷹の運べる手紙には制限がある。溢れる言葉を各々の一点つちに込めてくれたんだ。

エノシラは手紙を胸に当てた。…何だか泣きそうになった。

「ね、エノシラ」

シドがそっと声を掛けた。

「返事を書いて鷹を送り返すんだ。君の手紙も入れるけれど…」  
モエギやシドの大切な要件に高かさを取って、エノシラに

割の当てられた紙片は僅かだった。長距離を飛ぶ鷹に、そんなに沢山の手紙は持たせられない。

小さい紙片の前でエノシラは考え込んだ。ノスリ大叔父様、教官センセ、叔母様達や、ナーガ様、オウネお婆さん、それにハウスの子供達。手紙を書きたい大好きな皆は山のようにいる。…どうしよう………？

\*\*\*

エノシラが西風のモエギ宅に滞在して一週間が過ぎた。

シドに着いて来たものの、彼は修練所の寮で、ソラと「気儘な二人暮らしだった。狭い部屋に、片付けないシドと、片付けても書物の山のソラの住処(すみか)……エノシラの座る隙間すらなかった。

で、見かねたモエギが自宅へ招いたのだ。こちらは元宿屋なので、空き部屋には事欠かない。

「嫁さん連れて来るんなら、身边をキチツとしてからにしろ。まったく！」

モエギに叱られて、シドは大慌てで新居探しに奔走している。過去には栄えていた部落なので、昔の石造りの建物がそこそこ残っている。直せばすぐに住める所も幾つかある。しかし何処でもいいって訳じゃない。風の流れを見て、相性のいい場所を見付けなくちゃ。

ちなみにモエギが昔の長の屋敷から今の宿屋跡に移ったのは、そこが彼女の病を治すのに、一番流れのいい場所だったからだ。

「あたし、水辺に住みたいな。あの池の対岸とか」

宿屋の窓から眩しそくに里の奥の池を眺めるエノシラに、モエギはゆっくり言った。

「それは駄目なんだよ、エノシラ。西風の里では水辺は神様の領域なんだ」

「あ、あたし……すみません」

エノシラは萎縮して口をつぐんでしまった。

「構わない。外から来た者が、いろいろ知らないのは当たり前だ。西風では水辺にある建物は祭祀に使う祭壇だけで、水の恩恵を受けて生きる者は水に敬意を献って、すうっと下がって住



まうのわ」

モエギは優しく教えてくれたが、エノシラは恥じ入って俯うつむいた。そうよ、便利な筈の水辺に誰も住んでいないんだもん。言われなくても分かなきゃ。あたしって間抜けだわ、気を付けよう……。

一つ自信をなくすと、雪ダルマ式にどんどん悪い風に思ってしまう。この娘のいけない癖だった。

陽が沈むと砂の原は一気に冷える。砂の一粒一粒も凍って、凍った風が砂の表面を撫でると雪原の地吹雪みたいだ。

太陽の子供の精霊達が、夜になって慌てて空へ帰る時、暖かい空気を皆持っていってしまうからだという。太陽は夜を過ごす生き物の事など知ったこっちゃないのだ。

「少しくらい、残しといてくれてもいいのに」

エノシラは恨めしげに星空を見上げて、窓の御簾を閉じた。未だこの気温の上下差には慣れない。

「北の草原の方が寒いのにな」

「風間暑い分、夜冷えて感じるんだ」

ルウとモエギは、エノシラの為に、厚目の上着や掛布を出してくれた。

「シドに温めて貰やあいいのにー」

今閉めた御簾を蹴って、ハトゥンが飛び込んで来た。このヒトにとつての玄関は怒なんだろか？

「父者、下品すぎ。エノシラはそいつの、慣れていないんだ。

あと、一声掛けて入ってくれ」

「お邪魔しますってか？」

「あ、あの、あたしの事はお構いなく……」

エノシラは小さい声で言った。嫌いって訳じゃないけれど、何かというと絡んで来るハトゥンがちょっと苦手になっていた。

「ほら、本人もこう言っている。第一、シドの嫁さんって事は、家族も同然だろ？」

「ああ、まあ、そっだが……」

モエギにはハトゥンが遠回して好意を示しているのが分かるのだが、エノシラは硬い表情のままだ。

「あの、あたし、先に休ませていただきます。おやすみなさい」

早々に部屋を抜け出すエノシラの後に付いて、ルウも部屋を出た。

「な、エノシラ、新しい書物を手に入れたんだ。私の部屋に見に来ないか？ それか、ボードゲームやる？」

「ありがと、ルウ。…でも、本当に疲れて眠いのよ。旅疲れが今頃出ているのかも」

エノシラはちょっとだけ微笑んで見せて、部屋へ引っ込んだ。

「砂漠の地へ来て、明らかに元気をなくしている。蒼の里ではあんなにシヤキシヤキ活発だったのに、今は黙って錆び付いたようにじっとしている事が多かった。」

連れて来た張本人のシドは、ここ何日か姿を見せていない。

彼はこれまで冬の間だけ子供達に色々教えていたが、今度正式に修練所の教官になった。インテリシエンスな若者が少ない西風の里では貴重な人材で、いきなり全学年での講義を任された。風間は講義、放課後は新居探し、夜は翌日の準備……と、エノシラに会いに来る時間がないのだ。

仕事に住む所……確かにそれはエノシラの為ののだが……。

\*\*\*

ルウはエノシラを部屋に見送ってから、カンテラを持って外へ出た。

「どこへ行く？」

窓から目敏くハトウンに見付けられた。

「ソラん所か？ 父が許可するまでは『清く明るくガラス張りの』だけー」

「父者そんなんばっかだな。だからエノシラにも引かれるんだ」

「男女の仲に他に何がある？」

「父者と母者みだいなのだ」

「……………」

娘に一本取られて豆鉄砲喰らった表情のハトウンと、モエギのクフツツて忍び笑いを背に、ルウは夜闇へ歩き出した。

人家を抜けて修練所への坂を登る。

「ルウさ…ルウシエル？」

建物の手前で声を掛けて来たのは、最近やっと『様』が抜けるようになったソラだ。

「何かご用ですか？」

「うん、えっと、明日から、東国回りだろ」

「ええ、早朝発ちます」

ソラは、西風の外交を担っている。衰えたこの部族が他所からの侵略を受けないのは、彼の口八丁…もとい、外交手腕が大きい。

「気を付けて行って来てくれ」

「はい、有難うございます」

ソラは中へ招き入れる事もせず、突っ立ったまま話をした。家庭教師として風間勉強を見てくれる時以外、けて二人きりで一部屋に居ようとしてない。父が案じるまでもなく、こちらは岩塩のように堅物だった。

「あと、シド、いる？」

「ああ、まだ里外れの廃屋群の方です。夜の氣の流れを見ると



かで」

「そうか……」

「何か、伝えておきますか？」

「いや、用って程でもないけれど……エノシラが元気ないんだ。仕事とか大変だろうけど、もっと会いに来てやれよって」

「ああ、はい、伝えておきます。しかし……？」

ソラは少し首をかしげた。

「彼女…、シドが忙がしくて側にいられないから元気ないんですか？ そんなご女なヒトじゃないと思うけれど」

「うん、私もそう思う。原因は、何となく見えている。私が初めて蒼の里へ留学した時の事、覚えているか？」

「ええ、はい？」

「凄かったろ」

「…ええ……」

ソラは目を細めて懐かしそうにした。

西風で長の一人娘として頑かたくなに育てられたルウシエルは、ただの子供として迎えられた蒼の里で、弾けたように元気になり、それまで押さえ込まれていた様々な才能を開花させたのだ。

「エノシラはその逆だ。そう考えたら分かりやすいだろ」

「ああ……」

ソラは眉間に皺を寄せて納得した。

そう…か…。自分達には慣れた事だけれど、エノシラにした  
ら、暗闇で頭をぶつける連続なんだ…。

「ソラ、誰が悪いってんじゃない。この西風の閉鎖的な空気を  
どうにか出来るんなら、とっくに母や蒼の里の駐在員がやっ  
ていた。どうにかは出来ないから、シドにエノシラの側にいて  
やってってくれて言いに来たんだ。私じゃ駄目なんだ」

「分かりました、必ず伝えます」

送らなくていいよ…と、坂の下まで一気に駆けて行くルウの  
後ろ姿を、ソラはじっと見つめていた。

自分の後ろをヨチヨチ着いて来たオレンジの瞳の子供。ふと  
気付くと、いつの間にか、自分のずっと先を歩いていた。

ルウが自宅へ近付いた所で、頭上で羽音がした。

「鷹だ?!」

こんな夜闇を躊躇なく降りて来るのは、蒼の里の特別製の鷹  
しかない。御簾越しの薄い灯火の窓枠へ、大きな鷹は難なく  
着地した。

「カッコイイな。今度ナーガに訓練のやり方、聞いといてくれ  
な」

ルウが居間へ入ると、モエギが鷹に干し蜥蜴を与えているの

を、ハトゥンが覗き込んでいる所だった。

「そんなに急ぐ用件はなかったと思うが…。鷹を酷使するなん  
て、ナーガらしくないな」

足に付けた筒を開けると、モエギ達への返事の他に、小さな  
包みが嵩かさを取っていた。

「蒼の里の男の子からルウへの贈り物じゃないのか?」

「何イ? だったら検閲だ!」

「まさか…」

ルウは包みを手に取って、ちょっと訝(いぶか)しんだ。

「エノシラ宛だ…。」

部屋に隠っていたエノシラは、ルウの屈けた包みを見て、寝  
惚けていた目を見開いた。

「何なんだ?」

「いえ、何でもないので、つまらない物なの…。」

そう言ってそそくさと包みを手の中に隠したエノシラに、深  
く聞く事はしなかった。また、どうってコトない事に、気を使  
っているのかもしれない…。

\*\*\*

翌朝、修練所が始まる前の早い時間に、シドが訪ねて来た。  
ソラがちよっと脅し気味に伝言したのだろう。しかしルウが呼  
びに行った部屋に、エノシラは不在だった。

「そっちへ出掛けて行き違いになったんじゃないか？」

「まさか、一本道ですよ。こんな早朝、どこに行っただ？」

「シドん所以に行き先なんてないだろ。何かあったんじゃないだろっな？」

モエギもシヨールを羽織って出て来て、三人で心配している所へ、エノシラはひょんと戻って来た。

「どこへ行ってたの?! みんな心配してたんだよ！」

シドが少し語気を荒くした。これから今日の講義の準備でやる事が溜まっているのと、苛ついているのもあった。

エノシラは俯いてぼそつと言った。

「すみません……散歩してたんです……」

「散歩?! 黙って? 身体を悪くしているモエギ様にまで心配かけて?」

シドは攻める口調になった。この忙しいのに、朝っぱらから散歩? 誰の為に頑張っていると思ってるんだ?!

「シド、私は平気だぞ。まあ無事戻って来たんだからいいじゃないか」

モエギが取りなしたが、エノシラの中で小さく何か爆発してしまった。

「あたし……! 散歩に出る自由もないんですかっ?!」

皆がハッと息を呑み込んだ間に、エノシラはおさげを翻して、

奥の部屋へ引っ込んでしまった。

普段なら決してそんな風に周囲を困らせる事はしない娘なのだ。そう、いつもいつも、そんな風になってしまった誰かを助ける役回りばかりの娘だったのだ……。

それからエノシラはしょっちゅういなくなった。

一人きりの散歩は段々頻繁に、時間も長くなって行った。さすがにヤバイと思いついたシドがママに尋ねて来たが、エノシラは何を話し掛けても上の空で生返事だった。

皆、最初は慣れない土地でのストレスだと思っていた。シドが仕事に慣れ、住処が決まって二人仲良く暮らし始めれば、段々に上手く収まる。それまでの辛抱だと。

この娘に青天の霹靂へきれきは付き物なのかもしれない。

ある日の昼過ぎ……、珍しく午後の講義が流れたシドがモエギ宅を尋ねると、例に寄ってエノシラはいなかった。

居間でルウとモエギと、茶を飲みながら待つ事となった。

「すみません、モエギ様に迷惑ばかりかけて。あいつ、自分の勝手が分かっていないんだ」

「シド、そんな風言うな。私はちっとも困っていないぞ。エノシラは何も言わないで、いつの間にか掃除だの片付けたの地

味な事をやってくれている。料理も上手いし。シドが要らんなら私の嫁にくれ」

「うん、そつだな、エノシラなら私の姉者になって貰っていい。シド、ずっと新居が見付からなければいいのに」

「勘弁して下さいよ……」

女性一人にチャキチャキ攻められて、シドは肩をすぼめた。

事実、この何日か多くの空き家や土地を見て来たが、納得出来る場所はなかった。どこかで妥協しなくてはならないのか？でも、どこも一長十短で、自信を持ってエノシラを迎えるには足りない場所ばかりだった。

「しゅめん！」

玄関で声がした。元老院の老人らしい。

出迎えたルウに通されて入って来たが、いつも三、四人でつるんで歩く老人が、何故か今日は一人だった。元老院の中でも、長老に近い側近の一人だ。

じゃあ僕はこれで……と、外そうとするシドを、老人は制した。

「待って待って、お主にも確かめたい事があるのだ」

「……？」

「あの娘……長い三つ編みの。あの娘の素性を、今一度確認したのじゃ」

「……は……？」

「蒼の里の妖精の娘……あの娘はジュンケツなのかな？」

「はあ……、血統は知りませんが、多分平凡な蒼の妖精だと思えます」

いきなりおかしな質問をされて、シドはキョトンと答えた。

「その娘は……その……お主の求婚を受けて、この西風の里へ来たのか？」

「……？」

「当然だろう……。他に何の理由があつて、わざわざこんな慣れない土地へ来る？」

目を白黒させるシドの横で、ルウが口を尖らせて答えた。

「では、お主と夫婦になるのだな……。本決まりなのだな……。あの娘と誓いを交わしたのだな？」

「しつこいな、そうに決まっているだろう」

「……いや、ちょっと待って下さい」

シドが眉間を指で挟んで考え込んだ。

「シド……？」

「一番最初、蒼の里の牧草地で告白した。『一人の女性としてずっと好きだった女』って」

「うん」

「んで、断られた。』気持ち嬉しいけれど』って。覚悟はして

いた。婚約者がいたから」

「ああ」

「でも、里から帰る途中の夜宮地に、突然現れたんだ。『会い  
たくなつたから来た』って。嬉しかった。それで、当然のよう  
に一緒に旅して、西風に来て……」

「ああ」

「……………」

「シド……」

「そういえば、彼女に告白の答えを貰っていない……………」

「……っていつか、僕、求婚プロポーズしてない……………」

「馬鹿野郎おお——!!」

ルウが凄いい勢いで立ち上がった。

「だって、流れで、言わなくても、分かるでしょ……、そうなる  
のが当然で……………」

しどろもどろのシドに、モエギも呆れ気味に言った。

「女性はな、省略していい部分と、絶対に押さえとかなきゃな  
らない部分とがあるんだ」

老人はヤシヤシ顔で三人を眺めながら、続きを話し出した。

「蒼の里で婚約者がおったのか。では、あの娘はシユンケツな  
のか？」

「だから、さっきも言ったように、血統は知らないって」

「いや、乙女の意味の純潔なのかと」

「……!!」

「婚約者もお主も……………その……………なんもしらんのか……?」

「なつたんで、そんな事、あんたに言わなきゃなんないん  
だ!!」

シドがテンパって声が大きくなった。

『なんもしらん』のが丸分かりだ……………。

「いやな……、交際しておるようなのだ。長老の所の末の孫息子  
殿と」

\*\*\*

ルウとモエギが口をあんぐり開けて、シドはお茶をひっくり  
返して立ち上がった。

「えっ? なっ? そんな……はあっ?!!」

余りに唐突な話に、頭の回路が付いて行かない。

「僕も馬鹿なと思つたわい。しかし、長老の一番下の孫息子……  
スオウ殿と、頻繁に湖の畔を仲睦まじく歩いていたり……」

「スオウだっ?!!」

シドは立ち上がったままもう一度叫んだ。スオウはシドより  
ちよっと年上の、修練所の先輩教官だ。シドに大量の講義を割  
り振って、多忙にさせた張本人でもある。

「そう、そのスオウ殿と娘御が、馬に乗ってそっと砂漠へ出掛けるのも、見掛けたのじゃ」

「そ、そ・ん・な……」

シドは池の底の水草のようにゆらゆら揺れた。

皆が顔見知りの狭い部落。男女が二人きりで外へ出掛けるのは、付き合っているって事……と、暗黙の了解があった。

「だから僕は、個人的に訪ねに来たのだ。スオウ殿は小さい時から見知っている。幸せになって貰いたい。相手が真剣でなかったら、お可哀想じゃ」

「……」

「スオウか。確かにイケメンで女の子に大人気だな。ルウの花婿候補にもあげられたが、きっぱり断った男前な奴だ」

顎に手を当てて妙に納得するモエギの前を横切って、シドはフラフラと戸口へ向かった。

「だ、確かめて……来ます……」

もつれる足で色々な物に躓(つまづ)きながら外へ出たシドの頭上に、今一番会いたくないヒトの声がした。

「まったく飽きさせないな。西風の連中は」

屋根の上に腰掛けているのは、半笑いの漆黒のハトウンだ。

「よっ！ 寝盗られ男!!」

「ハ、ハトウン様！ いくら貴方でも……!」

「いくら俺でも、何だよ」

ハトウンはひらりとシドの真ん前に降りて、額をピンと弾いた。

「だから子供だっただ、お前は。彼女に会って何て言う？ 責めるのか？ 婚約者から彼女を略奪したお前が」

「……!!」

「頭を冷やして、馬曳いて来い。彼女はさっき砂漠の方へ飛んで行った」

いつの間にか、ハトウンは自分の黒衣の馬を曳いていた。

「エノシラは一人でしたか?」

ハトウンと馬を並べて砂を駆けながら、シドは俯いて聞いた。

「ああ、エノシラ一人と、青い目の色男一人……」

「……!!」

「だから、落ち着け」

ハトウンはシドの青毛の手綱を掴んで停止させた。

「何を落ち着くんです?! 貴方に何が分かるってんです?」

モエギ様の気楽な通いダンナで、何の責任も背負っていない貴方に」

ハトウンの漆黒の瞳の奥に一瞬稲妻が過ったが、すぐ消えた。



「ああ、俺は何も背負っていない。今はな…」

「……。」

「俺の女房と娘の価値を、女の基準を純潔かどうかなんてので測る西風のボンクラどもがいつまでも気付かないのなら、いつでも拐かぎり取とって行ってやる。それをしないのは、あの二人が西風を大事に思っているからだ。あいつらが大事にしている物、全部引ひくくめめて、俺はあいつらを愛あいす。」

「……。」

砂丘を越えた岩山に、少しの灌木と地衣類の緑が覆う場所があり、おさげ娘と草の馬はそこにいた。スオウの姿は見えない。

エノシラは、近寄って来るシドに気付いて、明らかに罰悪い表情をした。

「エノシラ、どうした？」

岩の裏から声がして、色男の登場だ。

筋肉の見本市みたいな美しい体型に理知的な顔立ち。人当たりもよくて人気者で、おまけに長老の孫…と、三拍子も四拍子も揃っているスオウだ。

「あれ？ シド教官。何でここに？」

「俺がお前に用がある！」

ハトウンがいきなりスオウの腕を組んで、否応なしに岩山の

向こうへ引きずって行った。去り際に横目でシドをギロリと睨んだ。自力でちゃんとケリを着ける！ って目だ。

「……………」

「……………」

エノシラは情けない顔で、スオウが引ひく張られて行った方向を気にしている。シドの頭の中は、必死で落ち着こうとする天使軍と、暴れまわろうとする悪魔軍の、大合戦が繰り広げられていた。

「あ……………」

長いか短いか分からない時間が過ぎて、シドが裏返った声を発した。辛うじて天使軍が勝利したようだ。

「その……………エノシラ…、僕は、君が、大事だ。君の大事な物、みんな引ひくくめめて、君を大事に思う事にした。例え、その…君が…僕の他に、どんな大事な物が出来ようと……………」

「本当ですか?!」

おさげ娘は目を輝かせて顔を上げた。

「いいんですか?!」

「あ……………ああ……………」

「ありがとう！ 嬉しい！ シドさん!!」

エノシラは駆け寄ってシドの両手首を掴んだ。

当のシドは、生きた亀虫を呑み込んだみたいな情けない顔をしている。そんなに大喜びしなくたって……………。

「よかったな、エノシラ！」

斜め後ろで色男の声がした。

建前も上司もあるか！ 一発殴ってやる!! 鼻息荒く振り向いたシドだったが、振り上げた拳は行き場をなくした。

「あれえ、セーンセ」

「シド先生だあ」

そこには修練所の子供が十人ばかり、目を丸くしてシドを見ていた。真ん中でスオウがニコニコしている。

「エノシラに、薬草の知識の講義をして貰っていたんだ。私の知らない事を沢山知っていて、助かったよ」

「……………」

シドは長あい、長あゝい時間を掛けて、目の焦点を、遠くで斜に構えてニヤニヤしているハトウンに合わせた。

「だって、俺、『二人きりで出掛けた』なんて、ひとつ言も言っていないぜえ……………」

\*\*\*

「エノシラは、私の祖父を助けてくれたんだ」

シドは岩山に並んで腰掛けて、スオウの話をぼっと聞いて

いる。上がったりがったりの感情はハトハトで、何かを聞き返す気力もない。

「最初、挨拶に来た時から、寝たぎりの祖父を凄く気にしてくれていたらしくて。蒼の里の自分の師匠に治療法を問ひ合わせてくれたんだ」

「……………」

あの僅かの紙片をその事に使ったのか…エノシラらしい…………。何日か後、薬が届いたって持って来てくれた。随分朝早くに息急(いきせ)まききって」

「……………」

「その薬を飲んで、言われる通りのリハビリをしたら、祖父はみるみる良くなってね。今では伝い歩きしている。彼女、マッサージにも通ってくれたんだ」

「……………」

スオウは、遠くの窪地で子供達に苔の解説をしているエノシラを眺めて、目を細めた。

「僕…一言も聞いていない…………。今日の授業だつて…………」

シドが俯いたままボソボソ言うのに、スオウは気の毒そうな顔をした。

「すまないな。祖父が失礼を言って、それで、拗(こじ)れさせ



てしまったんだ」

シドは顔を上げた。

「あの朝薬を飲んだら、一発で身体の痛みが引いてね。感謝すべきなのに、愚痴を溢こぼしたんだ。蒼の里にはこんないい薬があるのに、シドもソラも持って帰ってくれようともしなかったって」

「なっ!! それは…!!」

思わず顔を向けたシドを、スオウは真正面から見つめていた。「分かっているよ。君もソラも博学ではあるけれど、医学は専門外だ。蒼の里の医療についてはほとんど知らないんだって、エノシラがすぐに言ったよ」

「……………」

「でもね、それで彼女、思い悩んでしまったんだ。自分の常識でよかれと思ってやった事が、ここ西風では思わぬ方向へ転ぶ。やりたい事はあるのに、怖くて出来ない…。そんな悩みを私が知ったのも最近だけだね。彼女、大好きな水辺にすら怖くて行けなかったんだ。それで、一緒に付いて歩いてあげた。その時、ポチポチと話してくれた」

シドはまだ足元に視線を落とした。悩みなら、僕に打ち明けてくれればいいのに……。

「祖父のマッサージは、私が強く頼んで来て貰っていたんだ。

彼女の整体術は一級品だよ。聞けば、蒼の里では立派な医師に付いて助産師の勉強をしていたっていうじゃないか。それは是非とも、この地で生かすべきだって言ったんだ。でも、彼女……駄目だった」

「……………」

「君や、モエギ殿に迷惑かけるって。女性を決闘で獲るような習慣の部族で、女性が出過ぎた事をやると、またおかしな事になるって」

「……………」

「ねえ、シド。彼女、考え過ぎてダメになっちゃうタイプじゃないっ」

「……………」

「それでねえ、私も色々考えて…。元老院の目の届かない所で、何か簡単な事をやって成功したら、自信が着くんじゃないかと思っただんだ。子供が好きだということから、口の堅い子供達を集めて、内緒の授業をやってみないかって」

「……………」

「下見とか入念にやって、今日の運びとなったんだけど……モエギ殿の夫君に見られていたとはね」

ハトウンは遠くにおに姿を消していた。今頃、事の顛末をモエギ達に話して大笑いしているのかも知れない。

「そんな所だよ。色々黙っていて済まなかったな」

スオウは太陽の位置を見て立ち上がった。そろそろ帰る時間だ。

シドも立ち上がった。言わなきゃ……。磔(はりつけ)台に登る囚人の心持ちだ。

「貴方の方がエノシラを分かってあげられる。エノシラも貴方を信頼している」

スオウは真顔で黙って振り向いた。

「何か……安心しました。よかった……貴方なら、エノシラを幸せに出来る……」

スオウの驚愕の視線が、シドを通り越した後ろに集中している。振り向くと、そこには凍り付いた表情のエノシラがいた。

何か行き違いがあったみたいだね、私は子供達連れて帰るから、二人でゆっくり話し合うといい。スオウは大人らしい心配をして、子供達を率いてさっさと去って行ってしまった。

シドは立ち尽くしていた。

スオウとエノシラは自分が思うような仲ではなかったのか？それでもエノシラがより多くを語り、真実の姿を見せていたの

は、自分ではなかった……。

「シドさん……」

エノシラのシンとした声。おさげ娘は能面みたいな顔で、岩の上に真っ直ぐに立っていた。

「さっき、シドさんが、あたしの好きなモノをまとめて好きになっってくれて言ってくれた時、嬉しかった。あたしのやりたい事も、希望も、みんな受け止めて貰えると思った」

「……」

「でも、シドさん、別の意味で言ったんですね」

「……」

「なら、あたしがシドさんに言う事は一つです」

無表情のまま、ふっくらした目の下から、涙がホトホトと溢れた。

「エ、エノシラ……」

「帰る……」

「えっ……」

「帰る帰る！ 蒼の里へ帰るうううう——！！！！」

いきなり顔をグシャッと丸めて、おさげ娘は天を仰いで泣き出した。

「エノシラ、エノシラ、落ち着いて」

「やだやだ！ もう嫌！ 帰る！ 帰りたい！！ やだあ——！！

あーんあーんうえーんうええええ——んん——！！」

触れようとすると、振り回す腕に弾かれる。シドは心底途方に暮れた。雀蜂の大群を相手にする方がまだ楽だ。

「分かった、分かったから、エノシラ。無理してでも休みを取るよ。蒼の里まで送って行くから……」

泣きじゃくっていた娘が、ゼンマイが切れたみたいにフツツと止まった。涙でグニャグニャになった瞳で、初めてのヒトを見るみたいにシドをマジマジと見る。口が金魚みたいにパクパクした。

次の瞬間、エノシラの瞳は、シドの後ろを回転しながら飛んでくる物体を映した。

——スッコオオオン！！！！——

シドはいい音させて吹っ飛び、久々の跳び回し蹴りを決めたルウが、本日二度目の台詞を吐いた。

「大馬鹿野郎おお——！！」

\*\*\*

……悪かった……あんなにキレイに入るとは……

……遠くでルウ様の声がする……



……何だっけ…？

……ああ、そうだ。

……エノシラを、失ったんだ…。

……頭の中が真っ暗だ。

……このまま目覚めなくてもいいや。

……もう、何でもどうでもよい。

……でも、この心地よさは何なのかな。

……ふわふわして、柔らかくて…。

——！！——

意識が呼び戻された。目を開けると、目の前にふわふわがあった。目の横にもふわふわ。頭の下にもふわふわ…。

「ああ、よかった。大丈夫ですか？ シドさん」

脳がとろけそうなエノシラの声。このふわふわは彼女の膝枕だったんだ。夢？ いや、現実だ。エノシラが膝枕してくれている。機嫌直して貰えたのか？

「シド、目を開けたのか？」

ルウ様の声。そちらを向こうと動いた瞬間、身体中の痛みが覚醒した。何でこんなあちこち痛いんだ？！

「大丈夫か？ ボロ雑巾みたいに吹っ飛んで岩山を転げ落ちたからな」

「びっくりました。ヒッってあんなに飛ぶんですね」

いつもの感じのエノシラの声。何だか物凄くホツとした。エノシラのぶっくらした優しい指が額のコブに当てられている。この痛みすら愛しい。おさげの先が鼻をくすぐる。…ああ…ずっとおおしていたい……。

「シド、ごめん！ 痛かった？ でも、あんまり酷い事言うから」

幸せを遮るように、ルウがヒョイと視界に入った。

「途中、スオウと行き合って話を聞いた。爺さんの早とちりだったろ？。エノシラは悪くないぞ、シド」

「ルウ……ううん。あたしがいけなかったの。西風では誤解されるような振る舞いだったのね。断るべきだったわ。もっと考えなきゃいけなかった」

「エノシラ、逆！ 考え過ぎなんだ。それでみんな自分のせいにして終いにしちゃう。ダメだよ、それじゃ」

二人の会話に何だか急かされて、シドは身を起こした。身体中ギシギシ痛む。

エノシラが心配そうに見ている。涙の跡は残っているが、取り乱した気配は微塵もない。さっきのは何だったんだ？ 一時の癩癩か？ だったらもうほじくり返さないで、なかつた事にしておいた方がいいんだろうか？

「陽が落ちちゃいましたね。帰りましょう。シドさん、馬に乗れますか？」

普段通りの優しいエノシラ。やっぱり彼女もさっきの振る舞いは恥ずかしく思っているだろう。じゃあ、こっちも大人らしく忘れてあげよう。

エノシラを失った訳じゃなかった。本当によかった……。

「スオウさんにお礼、言っておいて下さいね。あたしはもうお話ししない事にします。これ以上誤解されては大変です。もう、授業を勧められてもやりません。長老様の治療もやめます」

里へ戻って別れ際、エノシラは真面目な顔でシドに言った。

「そこまで気にしなくても…とも思ったが、スオウに近付いて欲しくない気持ちもちょっぴりあって、うん、分かった…と、シドは普通に手を上げて別れた。

エノシラも、肘の高さで小さく手を振っていた。

シドの怪我を見てスオウは、明日の講義は代講するから休んでもいいよ、と言ってくれた。

で、ソラもないし、疲れと痛みが重なって、翌日は昼過ぎまでぐっすり寝ていた。起こされたのは、血相変えたルウシエルに……だ。



「起きろ——!! シド! 何でお前がここに居る!」

「何でって……休みの日に自分の部屋で寝てちゃいけないんですか?」

寝起きを襲撃されてグシャグシャ頭のシドは、不機嫌に抗議した。

「何で寝てるんだ! スオウが、気を利かせてシドには休みをあげたって言っていたから、てっきり今日は関係修復のデートをしているもんだと……」

「はあ?」

「普通するだろうが! 泣かせた後のフォロー!!」

「だって、あれは……」

「だってもへちまもない!」

シドはしぶしぶ起き上がった。

「エノシラ、まだいないんですか?」

ルウは仁王立ちのまま頷いた。

「長老人所じゃないんですか?」

ルウは首を横に振る。

「じゃあ、散歩とか…、水辺でも歩いてんじゃないですか?」

ルウは眉間に縦線を入れて黙っている。

「そんなの、寝ていた僕に分かる訳ないじゃないですか。きっと、まだどこかで、やりたい事でも見つけたんでしょ?」



「……………荷物も、馬も、無いんだぞ……」

シドはいっぺんに目を醒ました。

\*\*\*

「昨日スオウに、シドに休みあげたって聞いていたから、エノシラが朝からいなくても心配していなかったんだ」

並んで馬繋ぎ場まで急ぎ足で歩きながら、ルウが説明した。

「んで、風過ぎ、借りたい物があってエノシラの部屋を開けたら、荷物が無い」

「置き手紙とかは？」

「無かった。でも、借りてた物とかキチンとまとめて、衣類もタベのうちに洗濯して干されていた」

「……………」

「手紙、書けなかったんだと思う。私も経験あるけれど、考え過ぎて書けないって、あるから……」

「……………」

馬繋ぎ場に着いた。二人の馬を引き出す。

「シド、私に構わず、すっ飛んで行け。エノシラはあんま速く飛べないから、シドなら追い付ける」

しかし、シドは馬銜を持ったまま、乗馬もせずに視線を地面に落とっていた。

「??？」

「シド??」

「エノシラ…、帰りたいって言った……」

「うん、昨日聞こえた」

「もう、西風で暮らすのは無理なんじゃないかな……」

「……………」

あんなに喋っていたルウが、急にダンマリになった。

顔を上げると、怒りも通り越した醒めた顔で息を吐きながらシドを見ている。

「……それなら、シド、せめて送ってやれ。危ないだろう、一人じゃ……………」

抑えた、乾いた声。それから自分の馬に置いていた鞍を降ろした。

「私は……………行っても無意味だ……」

茫然とするシドを取り残して、ルウは自宅までトボトボ歩いた。

何だったんだろう…？ エノシラが来て嬉しかった。これから彼女と過ごす日々を考えてワクワクしていたのに、事態はどんどん悪い方向へ転がり、とうとう大切なヒトを二人も失ってしまった。手放して浮かれていた自分がいけなかったのか？

自宅へ入ろうとすると、屋根の上に視線を感じた。

「父者(ていじや)……」

「お前もとうとう大馬鹿者に愛想が尽きたか」

「…うん…。帰りたいって言われて、はいそうですかって放棄しちゃう位なら、初めから連れて来るなってんだ。何で回し蹴り喰らったのか分かっていないんだから。おまけにその後、全くフォローがなくて、堪りかねたエノシラが別れ際にカマをかけてもスルー…」

「ああ、自分は今もうやりたいこと何にもやらないようにします…ってトコだな。あそこは、否定して励ましてやる所だよな。俺でもビックリしたぞ。彼女が頭が真っ白になって立ち去りたくなる気持ちも分かる」

「その通の……って?? 父者?? いたっけ??」

ハトウンは口の端をニヤリと上げて屋根から飛び降り、繁みの隙間から何やらスリと引っ張り出した。いきなり黒衣の馬がそこに現れた。

「父者?? これって??」

「砂漠の跳び蜥蜴から貰ったなめし皮。光の反射で、姿を眩ます事が出来る」

ハトウンの手には、又々又々した薄い皮が見えたり見えなかつたりして揺れている。



「はあ？」

「賭場の戦利品だ。奴ら、チョロかった」

ハトウンが、里の者に見られずに、モエギの家に簡単に入  
り出来ていた秘密が分かった。

「て・て・じゃ・・・！ 立ち聞きは趣味が悪いぞ！」

「出る機会を逸したただけだ。しかし娘よ、男つてのは、なか  
か子供から脱却出来ん生き物なのだ。シドもな。見捨てるのは  
しばし待ってやってくれ」

「はあ・・・」

「お前ももう何巡か男を変えたら分かる」

「今の一人で結構。父者、本っ当にシドに甘いん。最初も浮  
かれて、一番にシドのお嫁さん見に行つたもんな」

「そりゃそうだ。剣を教えてくれて、俺の後をテケテケ付き  
まどつていたちびっこナイトが、惚れた女を連れて来たんだ。

保護者Bとしては、一番に歓迎してやんなきゃいかんだろ。子  
供は大人にして貰った事は結構忘れちまうもんだけれど、大人  
の方は慕ってくれた子供の事を、しつこく覚えているモンなん  
だわ」

「ぶっつん・・・」

「取りあえず、行くぞ、娘よ」

気の進まないまま飛んでいたシドだが、すぐにエノシラを発  
見出来た。来た時と同じに、砂漠の入り口で馬を降りて裸足で  
歩いていたので。

シドは彼女の少し後ろに静かに降りた。

「……………」

エノシラはシドに気付いている筈なのだが、相変わらず両手  
に靴を持って、爪先立ちでゆっくり歩いている。

「エノシラ・・・」

「…サラサラして、天花粉みたい・・・」

エノシラの声は掠(かす)れて抑揚のない、棒読みだった。

「何も言わずにいなくなったら、みんな、心配するだろ」

「手紙、置きに行つたわ。貴方の部屋に」

「えっ」

「一人で帰れるから送らなくていいって手紙」

「そう？ 見つけれなかった・・・でも・・・」

「ぐっすり、気持ちよさそうに寝てたから……………何だか、手紙置  
くのも嫌になって、丸めて捨てて、馬繫ぎ場まで走ってそのま  
ま飛び立ったわ」

「!! 寝てる事を責められるの、僕っ・・・」

シドはムッとしてエノシラの肩を掴んで前に回った。

「…!!」

おさげ娘の眼も鼻も、これ以上ない位真っ赤でグシャグシャだった。涙が顔を溶かして形を変えてしまったかと思える位だ。

この娘の昨晚が、苦悶の地獄だったのが伺い知れる。

声に抑揚が無いのは、疲れ果ててまともに喋る気力さえ失っているからだ。

「エノ…シラ……」

「本当に一人で帰れます。野宿も慣れたし。…一人で帰りたいの。……帰らせて……」

「……………」

エノシラは足の砂を払って靴を履いた。

「砂漠とお別れね。怖い所は見ず仕舞い。好きな所しか見付けれなかった。貴方に対しても。じゃあね……」

本当に馬に乗ってしまいそうなエノシラの手首を、シドは握んだ。

「ほ、僕に不満があるんだろ。言ってくれればいいじゃないか」

「…不満……」

「何も言わないで、帰っちゃうだけなんて、ズルいよ!」

エノシラは掴まれた手首を静かに上げて、シドに向き直った。

「そう…あたしにも教えて。シドさん、あたしの何処を好いてくれたの?」

「えっ?」

「教えて……」

「えっ、えと……元気なトコ。チャキチャキ動いて、気が回って優しくて……。それで、自分のやりたい事をちゃんと持っている」

「そう、よかった……」

エノシラは真っ赤な眼でちょっとだけ微笑んだ。

「自分でも好きな所だわ。でも、砂漠へ来て、そんなあたしでいられなくなったの。シドさんの好きなあたしでいられない……。だから、帰った方がいいの」

\*\*\*

貴方の好きなあたしでいられないから、帰った方がいい……。

エノシラの言葉に、シドは金縛りに遭った。

自分は、エノシラをお嫁さんにする事ばかり考えて、彼女が西風の里でどう生きていくか…なんて、考えた事もなかった。

ただ、自分に付随して『シドのお嫁さん』として、上手く部落に溶け込めるだろうとだけ思っていた。

「エ、エノシラ、助産師をやりたいなら、いいよ、やっても。やらせてあげる……」

エノシラのおさげの先までヒシヒシと冷気が走ったように凍り付いた。

「もいっぺん蹴飛ばしに行ってもいいか?」

離れた砂山の横に、ハトウンとルウ親子が蜥蜴のなめし皮を被って潜んでいた。

「エノシラは助産師になろうと自分で決意して、自分で努力して来たんだ。何で今更、誰かに『やらせてあげる』なんて言われなきゃなんないんだ」

ルウがじれったそうに親指の爪をギリギリ噛んだ。

「勘弁してやってくれ。あれがああ唐変木の精一杯だ」  
ハトウンも肩で大きく息を吐いて唐変木を見やった。

「それとも、子供達の集まるハウスみたいな家にしたいのかな? うん、いいよ、何でも君の楽しく過ごせるようにしたらいい」

シドは一生懸命喋っているのだが、エノシラの様子はますます凍り付いて行った。

エノシラだって、どうすれば西風で楽しく過ごせるかなんて分からない。それを一緒に考えて、共に築いて行って欲しいヒトに、そんな丸投げにされたら途方に暮れる…。シドに悪気がないのが分かるだけに、余計に苦しいのだ。

「おや?」

シドのヘタリっ振りに、どう助け船を出したモノかと思案していたハトウンが、空を見た。西風の方向から何か飛んで来る。低空飛行だが、馬より大きな物……馬車だ。

「おやおやまああ」

さすがのハトウンも驚きの声を上げた。二輪の騎馬車に毛皮を何重にも敷いて収まっているのは、わら半紙を丸めたような長老だ。御者は困った顔のスオウ。

びっくり仰天しているシドとエノシラの前に馬車は止まり、老人を助け降ろすと、スオウは身を引いた。何だかシドに物凄く遠慮している感じだ。

「娘御! エノシラ殿……」

長老はヨロヨロとエノシラに手を伸ばした。

「お爺ちゃん! 無理しちゃ駄目よ!」

お、お爺ちゃん?! 固まるシドを通り越して、エノシラは老人に駆け寄って肩を抱いて支えた。

「エノシラ殿お…、見てみなされ、このように歩けるようになったぞい」

「うん、凄いわ! お爺ちゃん!」

「どうじゃ、もうそなたに弱虫だの腰抜けたの言わせまいぞ」

「はい、もう言いません。ご立派ですわ」

「長者にそんな口きいていたのか…。」

シドは口も挟めないで呆然と突っ立っている。

「蒼の里へ、帰ってしまふのかい？」

長者はエノシラの悲惨な風体を切なさうに見つめてから、シドをギロリと睨んだ。

「ええ……お爺ちゃんも元気でね」

老人は鼻をすすった。

「その…そなたに…、まだ感謝を示せていなかった。そなたは金品は要らぬと言った。それで僕は考えたのだ」

老人は身を引いて、エノシラの手を両手で握った。

「ありがとう、感謝する…。これでいいのか？」

エノシラは満面の笑みを溢した。

「嬉しいです、長老様」

シドも、スオウも…隠れている二人も、ビックリ仰天、口をあんぐり開けた。あの傲慢の固まりの老人が、あまりに素直な礼を述べたのだ。天変地異でも起こるんじゃないか？

「そなたの謎掛なぞ、簡単だったわい。子供の時、何かして貰ったらどうしなさいってお母さんに教わったか…だと？ まあ、大昔の事過ぎて、思い出すのに時間が掛かったがの」

長者はこんな顔が出来たのかと思う程、溶ろけるような顔で

笑った。

「エノシラ……」

なめし皮の下で、ルウは胸を震わせた。

「さすがだ…。さすが、エノシラ…。私の、蒼の里のおぶくろさん……」

ハトウンも目を丸くして感嘆している。

「思ったより大物だな。シド、でかい魚を逃したぞ」

静止の中動いたのは、それまで馬車の向こうで黙っていたスオウだった。

「本当に、帰ってしまうのかい？」

「はい…色々、お世話になりました」

「では、シドとは切れるんだね？」

「……え…」

「手を振って、君に申し込んでもいい訳だ」

「えっ?!」

「うえ!!」

エノシラは口をポカンと開け、シドは顎がハズれた。

「改めて申し込むよ。私と一緒に下下さい。二人で、西風を繁栄させる幸せな家庭を築こう」

スオウはスマートにサラリと言った。

シドにはスッポリ抜け落ちていた事。

こんな人種って……いる……。

「おお、そうじゃ、それがいい。最善じゃ」

長老も手を叩いた。

「おいおい……」

ハトウンは苦笑いしたが、ルウは真剣に腕組みした。勿論シドの応援はしたが、エノシラに幸せになって貰いたい。もしかして……スオウって線も、アリなのか…？

「……………」

当のエノシラは、ネジが十本くらい跳んだみたいに停止している。だって昨日地の底に落とされて一晩寝ていなくて、今しがたのシドとの会話でも相当の体力を使ったのだ。もう許容を越えてオーバーヒートしている。

「ね、取り敢えず里へ戻りませんか？ 私にも君とよく知り合える機会を下さう」

ソツのない色男の手首を、横からガツシリ掴む手があった。沈痛な面持ちのシドが、その手を引っ張って、自分の手の甲をぶつけるように合わせた。これは砂漠の男達の一つの合図だ。

「シド……」

「け、決闘を申し込む！ スオウ！」



\*\*\*

「ほほお、ほお、ほお・・・!!」

ハトウンがヒュウと口笛を吹いた。

「父者、喜んでいる場合じゃないぞ」

「おおそうだ、娘よ。あのスオウという男は、腕は立つのか？」

「体術でも拳術でも右に出る者はいないぞ」

「色男に重ねてそれかい……やだやだ」

確かに、長老の孫として潤沢な栄養を得て育った筋骨隆々のスオウと、みなしごで厩で育った痩せっぽちのシド。見栄えだけでも雲泥の差がある。

ハトウンは蜥蜴のなめし皮を被り直した。

「では、もう少し前に出よう」

「父者、決闘に手出しするのは禁忌だぞ」

「手出しなぞ不粋な事するものか。シドのアホタしがケチヨンケチヨンにされるのを、最前列でじっくろ見物させて貰うのみ」  
「……………」

「や、やめて下さい、そんな事で怪我しないで……」

「砂漠の男は申し込まれた決闘は受けて立つのが筋だ。下がっていなさい」

スオウはもうすっかり本命の彼氏気取りで、エノシラを退け

て上衣を脱いだ。

「素手でいいね、シド」

「……………いつでも……」

二人は拳を構えて円を描き、一周半した所で砂を蹴った。

「はああっ!!」

「うおおお!!」

シドの拳は思いきり空を切り、軽くかわしたスオウのカウンターがきれいにテンプルに入った。脳を揺すられて、シドは簡単にダウンした。

「一撃で終わらせてあげたよ。明日からの仕事に差し支えらると困る」

背中を向けたスオウの膝に、地面からシドがタックルした。

「まだ終わりじゃない!!」

不意を突かれたスオウだが、そのまま相手の身体を抱え上げて、今度は投げ飛ばした。

「くっ……!!」

背中をしたたかに打ったシドは、それでもヨロヨロ起き上がって、もつれる足でスオウに向かって行った。そうして倒されても倒されても、鼻血と胃液を吐きながら、闘う事を止めなかった。

「やめて……やめ……やめ……やめ……」



エノシラは足を震わせてオロオロするばかりだ。医師の弟子だから血は見馴れているが、本気の殴り合いなんて見た事ない。

「うへう……！」

吹っ飛ばされたシドが、蜥蜴の皮の下に隠れているルウとハトウンの目前に転がった。

顔の色んな穴から色んな液を流して、まるでゾンビだ。それでも起き上がってフラフラとスオウに向かって行く。

ハトウンはボソツと口を開いた。

「カッ」悪いだろ……」

「……父者……」

「決闘なんて、そんなスマートなモンじゃない。ボロボロのドロドロになった拳句、大事なモノを失うんだ」

「……………」

「それでも、男達が決闘に走るのは…、娘よ、ここん所はよく覚えておくんだ。不器用でアホタシな男共は、こんな方法でしか自分の本気度を表現出来ないからさ」

「……………」

「うがあああー!!」

拳を振り回して突進するシドをかわして、スオウが今度はみ

ぞおちに膝蹴りを入れた。肝臓を打たれて地獄のダメージを受け、シドはとうとう失神して崩れ落ちた。

「シドさん!!」

エノシラが、倒れて動かないシドに駆け寄った。

「決闘に勝ったのは私だ、エノシラ……」

スオウが、肩で息をしながら言った。

「私が得たのは『君に申し込む権利』だけ。あくまで最終的に選ぶのは君だ」

「……………」

「敗者を選んだ者なぞおらんわい」

長老が高らかに言った。

「恥ずかしい事だ。選んだ方も、負けた方も。部落内で肩身が狭くなるぞ」

「お爺様、私と貴方が黙っていれば済む事です。あくまで、私とシドの間だけの決め事です」

スオウは再びエノシラに手を差し出した。

「ゆっくり考えなさい。今は、部落へ帰りましょう」

シドは暗い所からずうんと意識を戻した。二日続けて痛みの中の目覚め。しかし今日は、ふわふわ枕はない……。

「よおー!!」

しかも……また、一番会いたくないヒトだ……。

「エノシラはルウが付き添って西風へ戻った。首の皮一枚繋がったな」

「繋がってなんかいいですよ……。もう……終了です……」

決闘に負けた限り、部落にエノシラがいても、話し掛ける事すら出来ない。口の中に血の味がする。横たわる砂漠の砂の上……言われてみれば……ホント……天花粉みたいだ……。

「大丈夫だ、これからのお前さん次第でどうとでも転ぶ」

「もうやめて下さい！ 何を根拠にそんな、自信たっぷりなんですか？ 僕は、貴方のその上から視線が大っ嫌いなんだ！」

シドはだんだんに声を大きくした。明らかに八つ当たりって自分で分かっているけど、抑えが効かない。

「貴方はいつだって外野を決め込んでいた。結局、モエギ様の重荷を共に背負ってあげる事もしないんだ」

「ああ、俺は、砂の民の総領を継ぐからな」  
「勝手ですね」

シドは自分でも驚く冷たい言葉を吐いた。

しかしハトウンは静かにシドを見降ろした。

「前にも言ったろ。俺は、俺の女房と娘が、西風を愛しているから、引くくめて愛す事になっている。だが、その西風があいつらを不幸にしたら、俺は今の俺ではなくなる」

「……………」

ハトウンは、半身起こして固まるシドを凝視した。漆黒の瞳は相変わらず光ひとつ湛えてないが、底の見えない黒さだけに、その奥に何が潜んでいるのか外からは分からない……。

「我が娘は自分で、自分の価値を分かってくれる男を見つけた。それでも娘の価値をちょっとでも貶(おとし)めたなら、俺は容赦しない。俺の女房と娘には、今の俺の全てを変えてもいいだけの価値がある」

「……………」

「お前はあの娘にどれだけ価値を感じている？ 覚悟を持っている？ 全て棄(あきら)めて裸足で砂漠へ来たあの娘に」

「……………」

\*\*\*

二人が立ち去った後の砂山が動いた。蜥蜴の皮を被ったルウシエルとエノシラが、砂を払って立ち上がった。

血を吐いて倒れている者を、このおさげ娘がどうして放って行かれよう。しかし迂闊に膝枕で介抱しては、また無責任にこのヒトを安心させてしまつ。

ルウが提案して、意識が戻ったら姿を隠す事にしたのだ。

「シドさん、動けた。よかった……」

「スオウ、ちゃんと手加減していた。あのヒト、野生の牛を正

拳突きで倒した事あるんだ」

「……………」

「ちょっと惚れた？」

「…バカ……………」

エノシラは罰悪そうに話を切り替えた。

「ルウのお父様、素敵ね。あんな風に考えているの、知ってた？」

「ああ、あのヒト、超家族ラヴラヴだよ。普段オチャラケてる分、リミット外すと誰にも押さえられなくなる。それがあから私も母者も、元老院と本気で喧嘩出来ないんだ」

「……………」

外から見ると分からないバランスが、この家族と世界に成り立っているんだ……………」

エノシラは今一度足先で砂を掻き回した。

「男のヒトは男のヒトで、女性とは違う場所で、一生懸命考えて生きているのね」

「うん…。ど、どうしよっか？」 エノシラ

「……………」

エノシラは一面の白い砂の原を見やった。地平線にとろけるような影が揺れる。自分だって、西風に来てシドさんのお嫁さんになる…って、フワッとしか考えていなかった。

あの蜃気楼のよう……………」

「明日も休んでいいよ。その腫れ上がった風体じゃ子供達が怯える」

決闘の翌日。

スオウにそう言われたが、シドは今度は早くに起きて、寮の窓から未練だらしく外を見ていた。

果たして、朝霧(あさもや)の坂を登って来る人影がある。しかし、残念…って言っては失礼だが、それはルウだった。

「部屋の掃除に来た。ソラが今日あたり帰って来るから、清潔なベッドに寝かしてやりたい。ちょっと出ていてくれ」

容赦なく追い出され、外に出て何気に部落を見降ろすと、中心のモエギ宅に人だかりがあった。

「…?」

よく見ると、老人ばかりだ。元老院の老人も、普通の年寄りもいる。

「…?」

訝いぶかりながらも、吸い寄せられるように坂を下って近寄った。

老人の輪の中におさげ娘がいる。しかし、習わして、決闘に負けたシドが話し掛ける事は出来ない。

シヨールを羽織ったモエギがスウツと横に來た。

「シド、あそこを見てみる」

「えっ。」

促された方向を見ると、エノシラの使っていた部屋の外壁に穴が開けられ、出入り口に設えられていた。突貫で作られたらしい戸口の横に、何やら布の看板が掛かっている。

—— 《診療所(仮)》 ——

「しっ、しんりょうしよ……?」

「そつ、昨日戻ったエノシラが自分で言い出した。こっちは願ったりだ。部落に医者はいるが、気軽にちよつと診て貰うような場所はなかった。特に女性にはな。あちらの医者との擦り合わせはキチンとやるさ。そういうのは私の役割だ」

「……………」

いきなりな展開だ。あんなに臆病だったエノシラが……。

「エノシラちゃん、開業したら一番にワシを着てくれよ。どうにも指が痺れてねえ」

「アタシが先だよ。蒼の里ではレディファーストって言ったの。」

老人達に揉みくちゃになっているエノシラを横目に、モエギはシドを本玄関の方へ誘(いび)なつた。

「長老を治したって噂が広まっている。頑固者達だって、自分に『いいモノ』に対しては扉を開くのさ」

「ゲンキン過客……」

「なあ、シド。エノシラは楽にこの立場を手に入れた訳じゃない。蒼の里で相当の努力をして來たのだらう?」

「…そう…ですね」

エノシラはあの厳しいオウネ婆さんの元で、何年も食らい付いて頑張っていた。それがこんな所で報われたんだ。素直に祝ってあげよう……。

「所でシド、看板にあった(仮)の文字を見たか?」

「え、ええ……」

「じゃあ頑張って探せ。《本・診療所》を開く、なるべく水場に近い、お前達の住処(すみか)を」

「あの、モエギ様…、実は、僕、決闘で……」

シドの言葉は無視され、モエギにグングン引張られた。そして廊下を突っ切り、診療所の部屋へ蹴り入れられた。

生なりの清潔な前掛けをしたエノシラが、涼やかな顔で待っていた。

「一番の患者はシドさんって決めていたんです。さ、そこに掛けてください」

否応なしにベッドに座らされ、顎を持ち上げられて、キラキラした眼で覗き込まれた。

「あら、回復の早い事。 やっぱり縫わなくてもよかったわね。さて、凍みるけれど我慢して」

「えっ？ うわっちー！」

口の切り傷に凍みる薬を塗られ、情けない声を出すシドに構いなしに、エノシラは今度は患者の衣服の前を下バツと開いた。

「エ、エノシラってば……！」

「直接皮膚を見なきゃ、内臓が大丈夫か分からないでしょ？」

あんな蹴りを受けたんだから。……うん、内出血はしていないみたいね。痛みを治める薬を塗っておきましょう」

「……………」

もうシドはされるがままに、ベッドに仰向けにされてカチンコチンで薬を塗られている。

「あのね…、あたし、考えたんです…」

柔らかい、ふわふわの指で薬を広げながら、エノシラはそっと囁いた。

「あたしが、しっかりと、あたしとして、『西風のエノシラ』になろうって」

「……………」



「そうして自信を付けて、一人で立てるようになったら……

そしたら、シドさんに告白しに行くの……」

「えっ!!」

「さあ、終わったわ。行った行った!」

戸口に押し寄せる老人達に押し出されて、振り向き振り向き診療所を去るシドを、宿屋の反対側の壁にもたれたスオウが眺めていた。

「羨ましいいな……」

「そっかいっ」

屋根の上には漆黒のハトウンが、草をくわえてクルクル回しながら座っている。

「お前さんみたいな恵まれた立派な男が」

「子供の頃からずっと羨ましかったですよ。蒼の長様やナーガ様といつも一緒にいて、留学まで出来た彼らが」

「……………」

「あのヒトの心まで……………」

「おや? お前さんは二人の為にわざと道化役を演じてくれたんだと思っただか?」

「最初はそのつもりでした。でも……………」

スオウは切なそうに診療所の方を見やった。

ハトウンはそんな色男を見て、口の両端をクィッと上げた。

「お前さん、諦めるのは早いぞ。俺から見たら、結構僅差だと思っただか?」

「…ホントに?」

「まだまだどう転ぶか判んないぜえ。何せ相手は、砂漠の風紋みたく日々変化する乙女」コロコロだ」

「……努力します!!」

色男は目に希望を持たせて、診療所の方へ駆けて行った。

「ホントに、面っしれえ奴ら!」

ハトウンは地上の喧騒から、遠くの砂漠の地平に視線を移した。

蜃気楼に映し出されるあの景色だって、何処かにちゃんと実物がある。

くおしまい

110100100100